

---

# 「東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道」 全体討論

---

General Discussion : The Formation of Agricultural Societies and Civilization in East Asia

春成秀爾

HARUNARI, Hideji

「東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道」のシンポジウムは、セッション1：農耕社会の形成、セッション2：文明への道—都市—、セッション3：文明への道—世界観・国家—の3部構成で実施した。各部の総括はそれぞれの座長に担当してもらった。そして、最後に、座長を進行役にして、農耕の始まり（座長・常木晃）、都市の始まり（座長・中村慎一）、シンボリズムの問題（座長・宇野隆夫）にしぼって全体討論をおこなった。以下はその概要である。

## 1. 農耕の始まり

最初に、農耕の始まりは社会のイデオロギーを変革することなしにはありえなかったこと、そこで新しいイデオロギーを表象するような社会統合のためのシンボリックな遺物が存在するはずであるとの考えから、西アジアでは人の頭骨をプラスターで装飾し目をつけたあと住居内に埋める頭骨祭祀（skull worship）が祖先崇拜とかかわり、祖先祭祀が農耕社会を統合する象徴になっているのではないか、と常木晃は問題提起した。

それをうけて、中国では新石器時代初期のシンボリズムとして臨潼姜寨遺跡の住居の床に人の遺体を埋葬している例があるのは、亡くなった人の上に住むという祖先崇拜にもとづく共通の思考があったのではないかと、甲元真之からの発言があった。農耕の始まりと祖先祭祀の始まりは関係があるのではないかと、今日的な視点であらためて追究すべき課題ではないかとの提言であった。

ギリシアでは新石器時代初期にさまざまな象徴が出現すること、それらの象徴は個人の特徴をあらわしていること、墓制においては前期は家の床下に埋葬し、後期になると集落の外れに墓地をつくるようになる、とコスタス・コチャーキスは紹介した。

日本の縄文時代のばあい、現在では原初的な農耕が存在したことを認めるようになってきているけれど、農耕の象徴が新たにあらわれたという証拠はあげることができない。水田稲作を本格的に始めた弥生早期に西日本一帯に突帯文土器が分布する。そして、朝鮮半島の無文土器の影響を受けながら弥生前期の遠賀川式土器の成立をみる。遠賀川式土器はその様式内容として「斉一性」に注目してきたように、甕・壺の形態・製作技法・文様から胎土の選択にいたるまで著しく共通している。遠賀川式土器の成立は水田稲作および豚飼育の生活に移ったことを象徴するアイデンティティーの一つの表現であった。遠賀川式土器の分布圏の拡大は、広く西日本で「農耕社会」というアイデア

---

を採用し、モノカルチャー（単一作物栽培）を指向したことのあらわれであった。しかし、弥生時代早・前期に水田稲作を始めるときには青銅器はまだ存在しない。鹿の神聖視は出土骨の減少から弥生早期に現れたことがわかる。鳥（サギ・ツル）の神聖視は木の鳥の出土によって弥生前期に存在したことが確かである。これらの証拠から、稲魂に対する信仰が弥生社会の根底にあり、この信仰が問題のアイデンティティーに相当すると私は考えている。いずれにせよ、自然条件、歴史的条件を異にする各地の集団が、なぜ等しく「農耕社会」を採用したのか、「農耕の象徴」は何であったのか。豊富な資料にもとづく事例研究が可能な一つとして、縄文・弥生移行期の研究の今後の展開が期待された。

## 2. 都市の始まり

西アジアでは、農業の集約化と都市化とは一体化して進行したことをグレン・シュワルツは指摘した。農場での余剰物をいかに集めるか、なぜ他に提供しなければならないか、余剰物を集約し統合するための新しいシステムとして都市の成立が導かれると主張した。

新納泉はブリテンのばあいをふまえて、余剰を集めるのが象徴の機能であろうと述べた。

メコンデルタに立地するオケオ（3 km×1.5kmの方形で5重の囲壁と4重の環濠に囲まれている）は交易と宗教によって成立した都市であった。オケオ遺跡にはレンガ・石による宗教建築遺構がのこされ、神像や仏像が出土し、さらにインドの護符・印章、ローマ金貨、後漢鏡などが出土している。物資と人の集まるところに都市が成立し、その上にマウリア朝インドや中国から宗教的なのものがぶさってくる。タイの他の巨大集落には宗教的な施設が認められていない事実は、オケオ遺跡固有の位置をあらわしている、と新田栄治は指摘した。

その一方、華南に成立した番禺（南越国）は商業によって成立した都市である。漢代の南越国は、インドと漢の巨大帝国にはさまれて初めて成立した東南アジアの都市であった、との理解を西谷大は示した。

そこで、異質なものを統合する機能をもつのが都市であり神殿であって、中心を設定し、首長層によって形成された「人と物のネットワーク」に各地の分業生産にもとづく諸物資を集め、再分配するのが都市の本質的な機能である、と「弥生都市」「弥生神殿」を造語した広瀬和雄は指摘した。

中国新石器時代では、囲壁も都市の象徴であって、「自然と文化」「聖と俗」を区別する機能をもっていた。そこに都市の機能が加わっていく、と中村慎一は述べる。都市には、政治中枢と祭祀中枢をもっていることを期待されている。囲壁にも、初期的な段階のもの、発展した段階のものがあり、どこで変質していることを見極めなければならないことを指摘した。

近世から現代の身近な例では、歴博のある佐倉は佐倉城の城下町として形成された一方、成田空港のある成田は成田山新勝寺の門前町として発達した。それに対して、現代のユーカリが丘は電鉄会社がつくったニュータウンである。プライマリーな都市、セカンダリーな都市、ターシャリーな都市が存在するので、都市の形成を単一の要因で説明することは無理があるということであろう。

## 3. シンボリズムの問題

シンボリズムには機能とそれがもたらす効果があり、個人の象徴のばあい、集団の象徴のばあい

がある。縄文時代の加曾利貝塚では環状集落という集落形態に集団のシンボリズムがあらわれているが、弥生時代にはそれが環壕集落という形に変化する。弥生時代の環壕については、防御を第一義的に考える立場と、自然から人間を区別する集落の象徴と考える立場がある。前者だと、壕を掘ってまもなくゴミ捨て場としても使っていたり壕の深さが浅い例があり、反対論者はそこを突く。後者だと、弥生時代をとおしてなぜ環壕がつかず間欠的にあらわれるのかについて問われると、説明に窮する。弥生時代の環壕については、中国新石器時代の「囲壁」の評価と同じ問題をかかえている。江戸城の濠は日本を新たに統一した徳川幕府の象徴の一部であった。象徴ではあったけれども、見る者をして江戸城を攻略することを諦めさせる実質的な意味をもつ防御用の濠でもあった。一つの構築物が二つの機能をもつこともあることを考慮しておきたい。

朝鮮半島では、慶尚南道徳川里遺跡のように巨大な支石墓をつくりその上に石積みで縁どった長方形の低い基壇を築いており、無文土器時代の首長の権威の高まりをみせている。しかし、その後は、首長権力は順調に発展することではなく、中国東北部で馬具と馬車の部品であった鑣・銜・車軸頭など青銅製品が馬・馬車から離れてはいつてくると、変形したり大型化したり鈴をつけたりして、シャマン個人に属する道具ないしは装身具となった。青銅の武器・儀器など個人的な象徴は発達し墓にも副葬されるけれども、集団的な象徴は未発達であった。そして、漢帝国による楽浪郡等の設置の影響をうけて前1世紀に副葬品の内容が変わっていく。

その一方、朝鮮半島と一衣帯水の弥生時代の北部九州では、朝鮮・中国から舶載された青銅器は別の展開をした。銅剣や銅鏡はシャマンがその職掌をはたすための道具として登場し、青銅器は当初、個人に属する武器・儀器として象徴の役割をはたした。しかし、まもなく武器の機能を著しく低下させた祭器へと転化し、集団の象徴へと変化していった。そして、大型化の道を邁進する。祭器は個人の墓に副葬することはなくなり、埋納つまり神への奉納という形でもっぱら消費され集団の象徴として終焉を迎えた。

中国西南部から東南アジアの銅鼓や、新田栄治がとりあげた銅戈は祭器であると同時に威信財として扱われ、個人の墓にも副葬された。日本列島の青銅器と比較すると、共通する側面と相違する側面とが鮮やかに浮かび上がってくる。中原に発する青銅器文化は、周辺地域に伝わり本来的な使い方から離れ、それぞれの地域で変化し独自の世界をつくりあげていった。

以上、全体討論の内容について私の考えをいれて不十分ながら要約した。各セッションでの総括討論を大きくでることはできなかったけれども、本シンポジウム全体の流れとしては、なぜ農耕を選択したのかについては、従来のような食料窮乏論だけでは説明がつかなくなってきており、農耕社会の形成についても祖先崇拜などの祭祀儀礼やシンボリズムを視野にいたした考察が必要であることが強調された。農耕、農耕社会、都市、文明、シンボリズムなど、どれをとっても世界標準の絶対的な理論は存在しない。諸文化、諸集団の地域的・歴史的な諸条件の違いにもとづいて展開した多種多様性を認めあい、柔軟な枠組みの理論構築をはかっていくほかないだろう。

在来の文化と外来の文化の高度なハイブリディティー（異種交配効果）をもってエトルスクの国家は成立した、とサイモン・ストゥダートは論じた。多種多様な文化が交わることによって、1+1が3、4、5……になっていくというハイブリッド効果が、学問の世界においても重要であることを示唆されたシンポジウムであった。

#### 4. シンポジウムその後

20世紀最後の年に開催したシンポジウムから早4年たつ。その間、日本では初期王権研究委員会編『古代王権の誕生』全4巻(2002—2003年, 角川書店)が刊行されたことが特筆される。東アジアはもとより中央アジア, アフリカ, ヨーロッパ, アメリカにおよぶ, まさに世界の王権と都市の形成に真正面から取り組んだ労作であって, 本シンポジウムのメンバーでは岡村秀典, 中村慎一, 新田栄治も執筆に加わっている。本シンポジウムではとりあげが不十分であった王権と都市の形成に関する世界の実に多様な事例を, 最新の研究にもとづいて集大成しており, この分野の研究を進めていくうえで不可欠の書となっている。

甲元眞之は, 本書でもとりあげた中国における農耕起源論に, 多様な生業関係資料を総合した基礎的考察を付した『中国新石器時代の生業と文化』(2001年, 中国書店)をまとめた。中村慎一は, 日本・韓国・中国・東南アジアの囲壁・環濠集落の集成図を編集し, 『東アジアの囲壁・環濠集落』(2001年, 金沢大学考古学研究室)を刊行した。壁や濠をもつ集落同士を比較しその意義を広い視野で体系的に論じていくうえで基礎となる資料集成である。岡村秀典は, 『夏王朝』(2003年, 講談社)を著し, 日本の学界では冷淡視してきた夏王朝について論じている。二里頭遺跡の最新の発掘情報を分析すると, 巨大な宮殿は漢代以降と基本的に同じ構造をもち, 「王者のまつり」をおこない, 王が君臣関係を目で見える形で確認すると宮廷儀礼を執行していたことを証明していると主張し, 夏王朝実在説を展開している。広瀬和雄は『前方後円墳国家』(2003年, 角川書店)を著し, 弥生時代の「都市」「カミ観念」を正面からとりあげ, 前方後円墳を首長層のネットワークの完成つまり「利益共同体の表象」ととらえることによって, 「前方後円墳国家」概念を新しく提出した。そして, 国家の内実は, 首長層が民衆から一方的に収奪する構造ではないと主張している。

その一方, 私たち国立歴史民俗博物館の研究グループによる炭素年代にもとづく弥生時代および朝鮮半島の無文土器時代の実年代の遡上の提案も重要である(『炭素14年代測定と考古学』2003年, 国立歴史民俗博物館)。これによれば, 縄文後期以降の畑稲作, 水田稲作の開始, そして弥生早・前期の期間延長, 中期末の「王墓」の登場まで期間延長は, 佐原真による斬新な指摘であった日本列島の「古代化」の早さの評価についても, その再検討を余儀なくしている。と同時に, 東アジアにおける弥生時代の時代背景の説明も, 弥生早期—西周, 前期—春秋・戦国, 中期—戦国—漢代, と変更せざるをえなくなっている。中国・朝鮮半島そして日本列島の人的・物的交流と社会変化をリアルタイムで論じる条件がようやく整ってきたといつてよいだろう。

現在の学界状況から, 21世紀の考古学の目ざすところは見えてきたことを実感する。ささやかな試みであったけれど, 私たちの国際シンポジウムの成果もまたその機運をもちあげることに役立つならば幸いである。